様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　6 月　15 日現在

機関番号：３４３０５
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１７２０２７６
研究課題名（和文）　ローマ帝国とアテネ　－ギリシア・ルネサンスの政治史的研究－

研究課題名（英文）
Transformation of Athens under the Roman Empire

研究代表者
桑山　由文（KUWAYAMA TADAFUMI）
京都女子大学・文学部・准教授
研究者番号：60343266

研究成果の概要（和文）：
ローマ元首政期におけるギリシア・ルネサンスの大きなうねりの下，帝国中央の政治支配層やギリシア文化圏各地の都市上層が抱くようになっていた「古のアテネ」への「あこがれ」に着目した。彼らのそうした「あこがれ」を投影・具現化された同時代アテネが，ローマ帝国の文化首都的存在へと変容していった過程を，パンヘレニオン都市同盟や，ヘロデス・アッティクス父子といったアテネ内外の視点から明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
Greek elites during the early Roman empire adored their classical past, and especially held highly idealized images of classical Athens. Their attitude also influenced Roman elites. This study explores how such idealization affected the transformation of Athens in the 2nd century, and reaffirmed this city as the cultural centre of the Greek East.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１１年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・西洋史
キーワード：ローマ史，アテネ，パンヘレニオン，ヘロデス・アッティクス

１．研究開始当初の背景

本研究課題の中心地域であるローマ元首政期のギリシア本土や帝国東部（ギリシア文化圏）については，日本国内における研究は極端に少なく，とりわけアテネを正面から論じたものは皆無に等しい。古代ギリシアやヘレニズム時代までは，当然のことながら，この地域は充分に研究されている。だが，ローマ支配下で政治的独立を失った前１世紀末以降はギリ

シア史の範疇とは考えられておらず，その一方，ローマ史研究者の関心は，イタリアなど帝国西部のラテン文化圏に集中している。研究代表者自身は，このようないびつな研究状況を是正すべく，2006年度から2008年度にかけて科研費の交付を受け（研究課題「元首政期ローマ帝国の変容と西アジア」），ローマ帝国東部について研究を進めてきた。その結果，西アジア出身の元老院議員たちがギリシア本土のアテネに深く関わり，その「文化首都化」に一定の役割を果たしていったとの認識を得た。それゆえ，ローマ帝国東部理解をさらに深化させるために，本研究課題にて，アテネの「文化首都化」そのものを考察せねばならないという着想に至った。

２．研究の目的

(1)アテネは，前 4 世紀後半まではギリシア文明の中心的存在であったものの，それ以降，地中海の歴史が変動する中で勢力を失い，前 2 世紀に共和政ローマの支配下に入ってからも，属州の一地方都市にすぎないままであった。しかし，ローマ元首政期，とりわけ後 2 世紀のハドリアヌス帝期（117-138 年）に入ると，アテネは，その都市外観と性格とを大きく変えた。皇帝自らのイニシアティヴで多くの公共建築物が建てられ，都市としての格も高められて，いわば帝国の「文化首都」とでも言うべき地位を獲得するにいたったのである。

本研究の目的の第一は，後 2 世紀の都市アテネのこのような「復興」の実態を探り，ローマ帝国におけるギリシア文化の史的意義を明らかにすることにある。

(2)さらに，このようなアテネの変容を促した背景として，本研究は，帝国中枢の「ギリシア化」とでもいうべき事態にも注目する。当時，プルタルコス，アッリアノスといった文人や，第 2 ソフィストと呼ばれるギリシア語弁論家たちが大いに活躍し，ギリシア文化が帝国全体で一世を風靡していた。この現象はギリシア・ルネサンスと称されるが，その影響はローマ中央政界にも及び，ローマ皇帝をはじめとする政治支配層は，ギリシア文化に対する造詣と憧憬の念を深め，アテネに往時の繁栄を取り戻すべく，積極的に関与していった。こうした帝国政治支配層やギリシア文化圏の都市支配者層の動向をも視野に入れて元首政期アテネの変容を再検討し，それを軸としてギリシア･ルネサンスを政治史的側面から捉え直すこと，これが本研究の第二の目的である。

３．研究の方法

(1)元首政期アテネの発展を，画期として名高いハドリアヌス帝期（117-138 年）だけでなく，後 1 世紀末のトラヤヌス帝期（98-117 年）から，後 2 世紀後半のアントニヌス朝期（138-192 年）にかけてという長期的視野から考察していく。とりわけ，ハドリアヌス帝期より後のアントニヌス＝ピウス，マルクス=アウレリウスの両帝期（138-180 年）に注目する。

(2)アテネやギリシア本土内外の諸勢力を対象に，彼らがどのようにアテネに関与し，その「文化首都化」を促していったのかを検討する。その際，ローマ元老院議員身分や騎士身分といったローマ帝国政治支配層だけでなく，ギリシア文化圏の諸都市や

人々がアテネをどのような都市として位置づけ，具体的に関わっていったのかにも着目する。

(3)ローマ元首政期のギリシア語著作を，当時の人々の心性を映し出す第一級の史料として再評価し，活用する。これらはしばしば古典期ギリシア文化の模倣に過ぎないとして軽視されがちであるが，本研究課題は，これらの著作の「文学」としての質を問うのではなく，人々がアテネに対して抱いたイメージを読み解くために用いる。

４．研究成果

(1)本研究は，ハドリアヌス帝によるアテネの「復興」とその後の発展を支えた存在として，第一にパンヘレニオン都市同盟が果たした役割に注目した。その成果が，論文「パンヘレニオンとローマ帝国」である。従来，この同盟創設はローマ帝国支配下でギリシア諸都市を統合する企てであったと理解されてきており，同盟への加盟要件がどのようなもので，いかなる都市が加盟したのかを中心に議論されてきた。しかし，本研究による検討は，ハドリアヌス帝の主眼は同盟そのものにはなく，むしろ，この同盟によってアテネでパンヘレニア祭を円滑に運営することの方にあったことを示す結果となった。すなわち，パンヘレニオン都市同盟創設の意図は，オリュンピエイオン落成などで都市景観の「復興」したアテネにギリシア文化圏やローマ帝国各地から競技者や観客を呼び込み，人的移動の中心地として活性化させることにあり，このようにいわばモノとヒト両面において整備されたがゆえに，アテネの繁栄はハドリアヌス帝期より後も続く長期的なものとなりえたことを明らかにした。

(2)次いで，この認識をさらに深化させ，本研究は，パンヘレニオン加盟都市が選出し，アテネに送り込んだ代表パンヘレネスに注目した。彼らはアテネに集って評議会（シュネドリオン）を開き，それを統括するのが「パンヘレニオンのアルコン」という役職であったが，彼らがパンヘレニア祭以外にいかなる活動を行なっていたのかに焦点をあてて分析した。

その結果，この組織の主たる活動地が，アテネの中でも，オリュンピエイオン（ゼウス＝オリュンピオス神の聖域）や郊外のエレウシスなど，前6～4世紀末頃の「昔日のアテネの栄光」と密接に関係する幅広い地域に及んでいたこと，そうした地域でさまざまなモニュメント奉納活動を行なうことで，2世紀アテネの繁栄を支えていたことが明らかとなった。

「２.研究の目的」でも述べたように，ハドリアヌス帝の頃は「ギリシア・ルネサンス」華やかかりし時代であり，古のギリシア人やその文化を至上のものとし，自身の思考様式や価値観をそれに近づけることがよしとされていた。ハドリアヌス帝のアテネ「復興」の背景にも，この古のギリシア文化への「あこがれ」が大きな比重を占めていたのであるが，パンヘレネスは，その「あこがれ」を目に見える形に具現化させるという役割を担っており，種々の活動により，同時代のアテネを古のアテネといわば「直接接続」し，前4世紀末から後1世紀までの不名誉な過去を忘却させ，あたかもアテネが古典期からローマ時代まで連続して全ギリシアの中心であり続けたかのようなイメージを作り出していたのである。

以上の成果は，学会発表「ハドリアヌス

以後のアテネ　ーローマ帝国支配下における「復興」とその実態ー」で活用されている。

(3)パンヘレニオンは，アテネ外のギリシア人が主導する組織であり，外部からのアテネ「復興」の動きを代表するものであった。それではアテネ内部の対応はいかなるものであったのか。平行してこのような視点からも研究を進めた。その成果の一部を活字化したものが，論文「ハドリアヌス帝のアテナイ「復興」とヘロデス・アッティクス父子」である。

考察の中心としたのは，アテネの有力家系に属し，ローマ中央で元老院議員ともなったヘロデス=アッティクス父子である（便宜的に父をアッティクス，息子をヘロデスと呼ぶ)。ヘロデスがギリシア・ルネサンスの代表的弁論家で，アテネ中心主義で名高い人物であったこともあり，従来，父アッティクスの方はローマ元老院議員としての経歴が強調され，アテネ「復興」に関与したのも，アントニヌス朝期におけるヘロデスの方と考えられてきた。

本研究は，父アッティクスに焦点をあて，父子のアテネとローマ中央双方での経歴を再検討することで，父の方こそが，トラヤヌス帝期に在アテネの有力者として，ハドリアヌスや小アジア・シリア出身元老院議員といった中央や地方の政治支配層との結節点的存在であったこと，それゆえに，アッティクスはハドリアヌス帝期になってからはアテネ「復興」の現地監督者的役割を担ったことを明らかにした。したがってヘロデスだけでなく，父子二代にわたるこの家系の存在こそが，トラヤヌス帝期からアントニヌス朝期にかけてのアテネ「復興」を都市内部から支え，外部の人々がアテネに「あこがれ」を投影していく際の受け皿となったのである。

(4)以上のように，本研究の特色は，アテネ外の人々の「あこがれ」をキーワードに，後 2 世紀のアテネ変貌の実態を，パンヘレニオン都市同盟という外部と，ヘロデス＝アッティクス父子という内部の両面から読み解いたことにある。ローマ元首政期，ギリシア・ルネサンスの大きなうねりの下，ギリシア文化圏各地の都市上層や帝国中央の政治支配層には「昔日のアテネ」への憧憬の念が育まれていたが，それら外部勢力との強いつながりを持つヘロデス・アッティクスの家系がアテネにて台頭してきたことにより，後 2 世紀には同時代のアテネで「古へのあこがれ」の具現化が可能となった。この状況は，ハドリアヌス帝期のパンヘレニオン創設により加速し，アテネはさらなる「あこがれ」を投影され，「理想の文化都市」としてアントニヌス朝期以降もその繁栄を保つこととなったのである。

このような視点からローマ支配下でのアテネの変容を考察する研究は，日本国内では「１．研究開始当初の背景」で述べたように皆無である。国外においても，アテネの変容は建築活動やハドリアヌス帝の政策などといった一面的な視点からしか理解されてこなかった。また，ギリシア・ルネサンス研究も個々の作品や著作家に関する研究が大半であり，アテネの変容と結び付けられることは少ない。本研究の意義は，政治史的観点からこれら諸側面を統合することで，アテネの「文化首都化」が，2 世紀を通じての長期的ムーヴメントであり，ギリシア・ルネサンスの一種の可視化でもあっ

たという新たな像を提示したことにある。

それでは，こうして成立した「文化首都」アテネは，3 世紀前半にシリア・アフリカ系の王朝であるセウェルス朝が成立して以降，どのような変容をさらに遂げていくのか。この点を考察することで，後期ローマ帝国時代をも視野に入れたギリシア文化圏の史的変遷が明らかになると予想される。今後の課題である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①桑山由文「パンヘレニオンとローマ帝国」『古代文化』62－1，2010 年，82-89 頁。査読有。
②桑山由文「ハドリアヌス帝のアテナイ「復興」とヘロデス・アッティクス父子」『史窓』68，2011 年，211-222 頁。査読無。

〔学会発表〕（計３件）

①桑山由文「ハドリアヌス以後のアテネ　－ローマ帝国支配下における「復興」とその実態－」歴史学研究会大会（於東京外国語大学），2012年5月27日。
②桑山由文「ローマ帝国時代のアテネ」東北学院大学オープン・リサーチ・センター公開講演会（於東北学院大学），2010 年 12 月 4 日。
③桑山由文「2 世紀アテネの変容とパンヘレニオン」第 8 回古代史研究会例会（於京都大学），2009 年 4 月 5 日。

〔その他〕

①桑山由文「書評 Sarah B. Pomeroy, The murder of Regilla: a case of domestic violence in antiquity」『西洋古代史研究』10，2010 年，97-101 頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
桑山　由文（KUWAYAMA TADAFUMI）
京都女子大学・文学部・准教授
研究者番号：60343266